

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

1月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,217.50 (17日)	1,148.65 (3日)
国内建値(円/g)	: 4,478 (23日)	4,395 (26日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 113.78 (24日)	118.96 (4日)

2017年1月の海外金相場は年初の4日に\$1,148.65とやや下げてスタートしたが、米国での原油などの商品価格の上昇や雇用条件の改善に伴う賃金の上昇からインフレ懸念が出始めたことより、価格水準を\$1,170へ切り上げた。6日には、米雇用統計の改善からやや下げる場面も見られたが、中旬入りすると、伸び悩んでいた中国やインドの実需買いが活発になったことにより反発、さらには11日のトランプ次期米大統領の記者会見で同氏が景気刺激策に言及しなかったことでドル安が進行、前年11月以来となる\$1,200台を回復した。17日は英国のメイ首相が欧州連合(EU)からの離脱に関する強硬な基本方針を示したことから、運用リスク回避目的の金買いが膨らみ、\$1,217.50まで上昇した。

その後、一旦は下げるものの、20日のトランプ米新大統領の保護主義色の強い就任演説を受け、為替相場がドル安に転じたことから、週明けの23日から25日にかけて\$1,210水準を堅調に推移した。しかし、26日以降は為替相場がドル高へ転じたことや金相場上昇による利益確定の売りが出て、再び\$1,200台を割り込んだ。ところが、31日には再び為替がドル安へ転じたことで急騰、\$1,212.80まで上伸して越月した。

#### 2. 為替相場推移

2017年1月の為替相場は年初4日に\$1=118.96円(TTS相場、以下同じ)とやや円安でスタートしたが、米金利の上昇一服を受けた持ち高調整による円買い・ドル売りが強まったことで、その後円高基調を辿り、6日には\$1=116.72円と前月中旬以来の円高・ドル安水準となった。

中旬前半はほぼ市場の予測通りの米雇用統計の発表もあり、同水準を小浮動推移した。この間、11日開催されたトランプ次期米大統領の記者会見で多くの関係者

が期待していた経済政策に関する踏み込んだ発言が出なかったことから、一時的に円が買われる場面が見られたが、大幅な円高に傾くことはなかった。ところが、中旬後半は、17日にメイ英首相が欧州連合(EU)単一市場からの撤退を表明すると、英経済減速への懸念から英ポンド売り・円買いが加速、リスク回避の円買いが対ドルにも広がり、18日には\$1=113.83円と11月下旬以来約1か月半ぶりの円高・ドル安水準となった。その後は国内輸入企業のドル買いや今後の米利上げに前向きなイエレン米連邦準備理事会(FRB)議長の発言からドルが週末にかけて戻すも、週明けの23日以降は20日のトランプ米大統領の就任演説を受けた円高・ドル安基調から、24日には18日を上回る\$1=113.78円まで円が対ドルで上昇した。トランプ新政権の政策の先行き不透明感が意識されたことが大きかった。

その後月末にかけて、日米の株価上昇により投資家の低リスク選好姿勢が和らいだことから、\$1=115円水準へ円が反落した。だが、31日には米国の移民政策への懸念などから投資家の低リスク選好姿勢が復活、「低リスク通貨」とされている円を買ってドルを売る動きが強まったことで\$1=114.81円まで上昇して翌月入りした。

対ユーロでは、円は英国のEU単一市場からの撤退表明によりポンド安となったことに連れ、一時的に高くなったが、そのとき以外は概ね€1=123~124円で推移した。

## 【国内】

### 1. 建値推移

2017年1月の国内金山元建値は為替相場や海外金相場がやや激しい上下動を繰り返したにもかかわらず、26日を除いて4,400円台をキープした。海外相場と為替相場の大きな動きによって円建て金建値の変動が抑えられ、他の月と比べても安定した値動きに終始した。

年初4日に4,418円/g(グラム)でスタート、上、中旬にかけては海外相場や為替相場が大きく変動したものの、建値はほぼ4,400円台前半での小動きとなった。24日には、主として円高要因から4,400円台を割り込むものの、すぐに4,400円台を回復、31日には弱含み基調ながらも4,407円と4,400円台を保って越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2016年12月分=平成28年12月分)

生産	:	9,779 kg	(前月比 4.7%減 前年比 11.9%増)
出荷	:	8,904 kg	(前月比 12.9%減 前年比 15.3%増)
在庫	:	6,628 kg	(前月比 15.2%増、前年比 26.8%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

12月の生産は前月比減だが、前年同月比は3か月連続のプラスと堅調。出荷は円建て価格が下がるも、前月の反動から大きく減少した。しかし、前年同月比では2か月連続の増。在庫は出荷減から前月比、前年同月比とも増。両方とも3か月連続

のプラスで増加基調。

### 3. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2016年暦年計=平成28年暦年計)

生産 : 116,420 kg (前年比 2.4%増)

出荷 : 115,020 kg (前年比 1.0%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

2016年の生産は前年比2.4%増の116tと3年連続で増加し、100t台も3年連続となった。また、2011年(平成23年)の132t以来の高水準。出荷は前年比1.0%増と、生産同様、こちらも3年連続で増加した。生産見合いという一面もあるものの、円建て価格が前年よりも低下したことで、消費者の購入意欲が増したことが大きかった。出荷は2011年(平成23年)の130t以来の高水準。在庫は生産の伸びを反映して前年よりも高い水準で推移した。3月末には7t台となり、2011年12月の8.2t以来の高水準在庫となった。

## 銅

### 【海外】

2017年のLME銅相場は年初の1月3日、\$5,574/tでスタートし、中国景気指標の好転、トランプラリーの再燃、供給障害懸念などを材料に、月末にかけて\$5,900台へと上昇基調を辿った。

中国経済は12月の財新製造業景気指数(PMI)が2013年11月以来の高水準、生産者物価指数は5年ぶりの高い伸び率となり、第4四半期のGDP成長率は6.8%と2年ぶりに加速するなど、財政出動や銀行融資に下支えられて、新年の景気浮揚への期待感が高まった。

一方、米国の第4四半期GDP成長率は年率1.9%増と前期の3.5%増から大幅に減少し、2016年通年でも1.6%増とドル高、原油安を主因に2011年以来の低水準にとどまった。こうしたなか、トランプ大統領が大型インフラ投資計画の1つである原油パイプライン建設を推進する大統領令に署名したことからトランプラリーが再燃し、ニューヨーク株価は史上初めて20,000ドルを突破した。

不安材料も相次いだ。英国の“ブレグジット”をめぐることは、英最高裁がEU離脱手続を正式に通告するEU基本条約(リスボン条約)50条の発動には議会の承認が必要との判断を下した。トランプ大統領はまた、イスラム圏7か国を対象に米国への入国を禁止する大統領令に署名し反発が高まった。

銅独自の要因としては、クリスマス休暇前にかけて335千tまで累増したLME在庫が1月26日現在264千tへと急減している。また、エスコンディーダ鉱山では労働協

約更改交渉が決裂し、グラスベルグ鉱山は精鉱輸出停止に伴い最大40%の減産が実施される可能性がある。

供給障害要因は次の通り。チンチリコミネロのヘメラズ銅鉱山(ペルー)で1月16日、豪雨による地滑りで坑口が塞がれ、作業員7人が生き埋めとなった。18日から救出作業が続けられ、20日現在1人の遺体が発見されたが、他の6名の生存は不安視される。同鉱山は国の納税、労働安全、環境基準を満たしていないいわゆる無認可零細鉱山の1つ。

ミネラエスコンディエーダのエスコンディエーダ銅鉱山(チリ)は1月24日、労組が新労働協約案を拒否したため、ストライキ突入の可能性が高まった。労組は交渉締結ボーンラスとして25百万ペソを要求したが、会社側の提案は8百万ペソであった。会社側はまた、新規従業員への諸手当の支給廃止を提案した。

コデルコのアンディナ銅鉱山(チリ)で1月26日、保全工事中の作業員1名が死亡したため、事故原因を調査するため操業が中断された。

エロカパーはジャグアラリ銅鉱山(ブラジル)の坑内採掘を再開し、2月から精鉱出荷を再開する。同鉱山は昨年1月の豪雨で坑内が水没し、オープンピット採掘のみの操業となっている。エロカパーは昨年12月、ミネラソンカライバの買収を通じて同鉱山を取得した。

需給状況については、国際銅研究会によれば、2016年1~10月の世界の銅鉱石生産は前年同期比5.2%増16,664千t、地金生産は2.9%増の19,415千t、消費は2.7%増の19,478千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲89千tから▲64千tへと僅かながら供給不足で推移している。報告在庫は9.6%減の1,355千t、在庫/消費比率は3.2週間から2.8週間に低下した。

鉱石生産の内訳は精鉱が7%増加、SXEWは1.5%減少した。国別には過去2年間に新規稼働と能力増強のあったペルーが43%増加したほか、カナダ、インドネシア、米国が回復し、メキシコは能力増強により増加した。しかしながら、チリは4.5%減少し、コンゴ民主共和国は減産により6%減少した。地域別にはアメリカが6%、アジアは10%増加したが、アフリカは4%減少し、オセアニアとヨーロッパは横ばいであった。鉱山稼働率は85.0%から86.2%に上昇した。

地金生産の内訳は一次生産が2.5%、二次生産は6%増加した。国別には中国が7%、米国は12%増加、メキシコはSXEW生産能力の増強により18%増加した。チリは1%減少、日本は4%増加した。コンゴ民主共和国とザンビアは減産のため合計で13%減少した。地域別にはアメリカが3%、アジアは6%、オセアニアは3%増加、アフリカは12%、ヨーロッパは3%減少した。精製工場の稼働率は83.8%から84.4%へとほぼ横ばいとなった。

消費は中国の見掛け消費が5%増加、中国を除く世界合計は実質的に横ばいであった。中国は生産が7%増加、ネット輸入は4%減少した。しかしながら、第3四半

期のネット輸入は1～6月の水準を40%下回った。第3四半期の見掛け消費は1～6月の水準を5%下回った。米国は4%、日本は3%減少した。地域別にはアジアが4%増加(中国を除くアジアは2%増加)、ヨーロッパは1.5%(EUは1%)増加、アメリカは3.5%減少した。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

1/4 680      1/10 690      1/13 710      1/18 690      1/25 720

### 2. 生産・出荷・在庫(2016年12月分=平成28年12月分)

生産       : 126,190t   (前月比 5.3%増、前年比 4.4%増)  
出荷       : 123,837t   (前月比 7.3%減、前年比 17.3%増)  
在庫       : 92,959t    (前月比 5.8%増、前年比 9.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

平成28年(2016年)12月の銅地金生産は前月比5.3%増、前年同月比4.4%増の126.2千tと前年比は6か月連続の増加となった。出荷は各7.3%減、17.3%増の123.8千tで前年比は4か月連続の増加となった。内訳は内販が前月比6.6%減、前年比7.1%増の80.2千tで各4か月ぶりの減少と5か月連続の増加、輸出は前月比8.5%減、前年比41.9%増の43.6千tで各2か月ぶりの減少と4か月連続の増加。内販のうち電線向けは前年比4.0%増の49.3千tで2か月連続の増加、伸銅品向けは同10.8%増の26.6千tで7か月連続の増加。在庫は前月比5.8%増、前年比9.4%減の93.0千tで前年比は3か月ぶりの減少となった。

### 3. 生産・出荷・在庫(2016年暦年=平成28年暦年)

生産       : 1,553,021t   (前年比 4.7%増)  
出荷       : 1,578,651t   (前年比 4.0%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2016年の銅地金生産は前年比4.7%増の1,553.0千tと再び増加に転じ、2014年(平成26年)に次いで史上3位となった(史上最高は2007年の1,577千t)。出荷は4.0%増の1,578.7千tで2007年(平成19年)に次いで史上3位(史上最高は2014年の1,605千t)。内訳は内販が1.0%減の938.0千tと2年連続で減少、輸出は12.3%増の640.6千tと2009年(平成21年)の641千tに次ぐ史上2位となった。内販のうち電線向けは3.4%減の574.4千tと1985年(昭和60年)以来の低水準、伸銅品向けは5.2%増の316.0千tで2010年(平成22年)以来の高水準。在庫は100千t水準で推移し、年末時点での在庫/生産比率は3.1週間であった。

#### 4. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成 28 年 12 月の銅電線出荷は前月比 8.9%減、前年同月比 2.0%減の 57.0 千t(推定)と再び減少に転じた。うち内需は前年比 2.4%減の 55.9 千tで再び減少、輸出は 28.5%増の 1.1 千tで 5 か月ぶりの増加。内需の部門別には、自動車は 8 か月連続、電気機械、その他内需、通信は 2 か月連続の増加となったが、電力は 4 か月連続の減少、建設電販も再び減少に転じた。

日本伸銅協会によれば、平成 28 年 12 月の伸銅品生産は前月比 3.9%減、前年同月比 7.3%増の 64.7 千t(速報)と前年比は 8 か月連続の増加となった。うち内需向けは前年比 5.8%増の 53.3 千tで 5 か月連続、輸出は 14.9%増の 11.4 千tで 2 か月連続の増加。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が 8 か月、自動車端子向けの黄銅条は 5 か月、コネクタ向けの青銅板条は 4 か月連続の増加となったが、エアコン向けの銅管は 3 か月連続の減少となった。

### 鉛

#### 【海外】

2017 年の LME 鉛相場は年初の 1 月 3 日、\$2,007/t でスタートし、中国景気指標の好転、トランプラリーの再燃に加え、スクウィーズも相まって、月末にかけて\$2,400 際へと上昇基調を辿った。

中国経済は 12 月の財新製造業景気指数(PMI)が 2013 年 11 月以来の高水準、生産者物価指数は 5 年ぶりの高い伸び率となり、第 4 四半期の GDP 成長率は 6.8%と 2 年ぶりに加速するなど、財政出動や銀行融資に下支えられて、新年の景気浮揚への期待感が高まった。

一方、米国の第 4 四半期 GDP 成長率は年率 1.9%増と前期の 3.5%増から大幅に減少し、2016 年通年でも 1.6%増とドル高、原油安を主因に 2011 年以来の低水準にとどまった。こうしたなか、トランプ大統領が大型インフラ投資計画の 1 つである原油パイプライン建設を推進する大統領令に署名したことからトランプラリーが再燃し、ニューヨーク株価は史上初めて 20,000 ドルを突破した。

不安材料も相次いだ。英国の“ブレグジット”をめぐることは、英最高裁が EU 離脱手続を正式に通告する EU 基本条約(リスボン条約)50 条の発動には議会の承認が必要との判断を下した。トランプ大統領はまた、イスラム圏 7 か国を対象に米国への入国を禁止する大統領令に署名し反発が高まった。

鉛独自の要因としては、LME 鉛市場が大口ワラント保有者によりスクウィーズが仕掛けられた。期近物ポジションの大半が大手トレーダー 1 社に保有され、19 日以降、スプレッドがバックワーデーションで推移している。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1～11月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比7.5%減の4,061千t、地金生産は1.2%減の9,812千t、消費は1.7%減の9,796千t、地金需給バランスは前年同期の▲37千tから+16千tへとほぼバランス推移した。

鉱石生産はアフリカが2.3%増加、ヨーロッパは横ばい、アジアは4.1%、アメリカは3.7%、オセアニアは32.1%減少した。国別にはオーストラリア、中国、インド、米国が減少した。地金生産はアメリカが1.1%、オセアニアは15.9%増加したが、ヨーロッパは横ばい、アジアは2.7%、アフリカは1.1%減少した。国別にはオーストラリア、カザフスタン、韓国の増加が中国の減少に相殺された。消費はアメリカが1.8%、ヨーロッパは9.5%増加したが、アジアは5.4%、アフリカは9.4%、オセアニアは12.5%減少した。国別には中国の減少が顕著。11月末の地金の報告在庫は前年同月比14.7%増の472千t、在庫/消費比率は2.0週間から2.2週間へとほぼ横ばい。

中国は鉱石生産が3.9%減の1,914千t、鉛精鉱輸入は24.6%減の697千t、地金生産は8.5%減の3,952千t、地金のネット輸出は38千tから11千tに減少、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は9.1%減の3,935千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

12/1	320	12/14	332	12/20	315	1/4	289	1/11	306	1/19	318
1/25	329	2/1	325								

1月はLME鉛相場が上旬の\$2,000/t水準から下旬の\$2,400弱水準へ上昇したことで、鉛建値も堅調推移した。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年12月分=平成28年12月分)

生産	: 16,804t	(前月比 4.3%増、前年比 3.8%減)
出荷	: 17,590t	(前月比 13.0%減、前年比 0.5%減)
在庫	: 18,599t	(前月比 3.8%減、前年比 23.8%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

12月の生産は竹原、細倉両製錬所の定修明けにより2か月ぶりの前月比増となったが、前年同月比は2か月連続の減。出荷は蓄電池の需要期終了から前月比減、前年同月比でも僅かながら減少となり2か月ぶりの減。在庫は4か月連続の前月比減、前年同月比も15か月連続の減。在庫レベルは2013年(平成25年)3月末の14,934t以来の低水準。

### 3. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年暦年=平成28年暦年)

生産 : 199,090t (前年比 2.4%増)

出荷 : 206,260t (前年比 3.3%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2016年の生産は低水準だった前年を上回り、前年比2.4%増の199千tと6年ぶりに上昇した。しかし、2年ぶりの200千tの大台とはならなかった。出荷は前年までの低迷基調を脱し、前年比3.3%増の206千tと2010年(平成22年)の214千t以来の高水準となった。蓄電池向け販売が回復基調となったことに加え、電線向け、無機薬品向け、輸出が大幅増となったことが大きかった。在庫は出荷の回復傾向から減少傾向で推移した。11月末に20千tの大台を割り込むと、12月末は18.6千tと2013年(平成25年)3月末の14.9千t以来の低水準となった。

### 4. 需要部門動向

12月の自動車生産台数は前年同月比4.2%増の781,378台となり、2か月連続で前年同月を上回った。

その結果、乗用車は前年同月比2か月連続でプラス、トラックは同4か月連続でマイナス、バスも同3か月連続でマイナスとなった。

2016年の自動車生産台数は前年比0.8%減の9,204,590台と2年連続で前年実績を割り込んだ。乗用車はプラスに転じたものの、トラックとバスが前年実績を下回った。

12月の自動車輸出台数は前年同月比2.7%増の422,836台となり、5か月連続で前年同月を上回った。2016年の自動車輸出台数は前年比1.2%増の4,634,097台となり、3年連続で増加した。

一方、12月の二輪車生産台数は前年同月比11.1%増の59,302台と3か月連続で前年同月を上回った。2016年の二輪車生産台数は前年比7.3%増の560,460台と2年ぶりにプラスとなった。

(一社)電池工業会の調査によると、11月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で2,382千個(前年同月比9%増)と再び増加し、自動車用以外の鉛蓄電池も688千個(同6%増)と4か月連続で増加した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで3,070千個(同9%増)と2か月連続で増加した。

鉛関連製品生産統計

		11月	12月(速報値)
自動車	数量(台)	840,439	781,378
	前年同月比(%)	106.6	104.2
		10月	11月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,809	17,532
	前年同月比(%)	97.7	104.3

2016年(平成28年)暦年生産計:自動車 9,204,590台(前年比0.8%減)。

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2017年のLME亜鉛相場は年初の1月3日、\$2,552.5/tでスタートし、中国景気指標の好転、トランプラリーの再燃を材料に、月末にかけて\$2,800 圏へと上昇基調を辿った。

中国経済は12月の財新製造業景気指数(PMI)が2013年11月以来の高水準、生産者物価指数は5年ぶりの高い伸び率となり、第4四半期のGDP成長率は6.8%と2年ぶりに加速するなど、財政出動や銀行融資に下支えられて、新年の景気浮揚への期待感が高まった。

一方、米国の第4四半期GDP成長率は年率1.9%増と前期の3.5%増から大幅に減少し、2016年通年でも1.6%増とドル高、原油安を主因に2011年以来の低水準にとどまった。こうしたなか、トランプ大統領が大型インフラ投資計画の1つである原油パイプライン建設を推進する大統領令に署名したことからトランプラリーが再燃し、ニューヨーク株価は史上初めて20,000ドルを突破した。

不安材料も相次いだ。英国の“ブレグジット”をめぐることは、英最高裁がEU離脱手続を正式に通告するEU基本条約(リスボン条約)50条の発動には議会の承認が必要との判断を下した。トランプ大統領はまた、イスラム圏7か国を対象に米国への入国を禁止する大統領令に署名し反発が高まった。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1~11月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比1.2%減の12,027千t、地金生産は12,532千tで横ばい、消費は3.5増の12,795千t、地金需給バランスは前年同期の+176千tから▲263へと供給不足に転じた。

鉱石生産はアジアが9.6%、アフリカは9.7%増加したが、ヨーロッパは横ばい、ア

アメリカは 1.7%、オセアニアは 45.6%減少した。国別には中国が増加したが、オーストラリア、インド、アイルランド、ペルーは減少した。地金生産はアフリカが 43.5%、アジアは 1.5%増加したが、ヨーロッパは 1.8%、アメリカは 5.3%、オセアニアは 6.2%減少した。国別には中国、韓国が増加、オーストラリア、インド、日本、メキシコ、米国は減少した。消費はアジアが 6.5%、オセアニアは 28.3%増加、ヨーロッパは横ばい、アメリカは 8.4%、アフリカは 6.4%減少した。国別には中国が増加、米国が減少した。11 月末の地金の報告在庫は前年同月比 9.0%減の 1,393 千t、在庫/消費比率は 5.5 週間から 4.9 週間へと低下した。

中国は鉱石生産が 18.5%増の 5,090 千t、亜鉛精鉱輸入は 43.3%減の 736 千t、地金生産は 6.3%増の 5,739 千t、地金のネット輸入は 7.3%減の 354 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 8.8%増の 6,169 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

12/1	355	12/6	361	12/9	355	12/15	379	12/20	352	1/4	343
1/10	355	1/13	361	1/18	355	1/23	364	2/1	370		

1 月は鉛相場と同じように、LME 亜鉛相場が上旬の\$2,500/t 水準から下旬の\$2,800 水準へ上昇したことで、亜鉛建値も概ね堅調に推移した。

### 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016 年 12 月分=平成 28 年 12 月分)

生産	: 46,846t	(前月比 9.3%増、前年比 7.1%増)
出荷	: 46,978t	(前月比 0.5%増、前年比 1.4%増)
在庫	: 74,222t	(前月比 3.9%増、前年比 5.8%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

12 月の生産は飯島製錬所の操業トラブルからの回復により前月比、前年同月比とも 2 か月ぶりの増。出荷は前月と今月の亜鉛相場の急上昇により、先高感を見込んだ買いが入って、内販が前月比、前年同月比とも 2 か月連続の増。在庫は生産増から 2 か月ぶりの前月比増、前年同月比も 4 か月連続の増。

### 3. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016 年暦年=平成 28 年暦年)

生産	: 533,689t	(前年比 5.8%減)
出荷	: 535,148t	(前年比 6.6%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2016 年の生産は前年より操業上のトラブル等は少なかったものの、2015 年 10 月以降播磨事業所での蒸留亜鉛の生産が停止されたことや、一部製錬所での長めの

休転や定修による影響で、前年比 5.8%減の 534 千 t と 3 年連続で減少した。これは 1967 年(昭和 42 年)の 520 千 t 以来の低水準である。出荷は全般的に低調な内需を反映し、前年比 6.6%減の 535 千 t と 2 年ぶりに減少した。これは近年最も低かった 2014 年(平成 26 年)の 564 千 t を下回り、生産と同じく 1967 年(昭和 42 年)の 520 千 t 以来 49 年ぶりの低水準となった。伸銅品向け販売は前年比プラスとなったが、亜鉛めっき鋼板向けがリーマンショック以来の低水準だったことと輸出が減少したことが低水準出荷に結びついた。在庫は出荷が減少したものの、生産も減少したため大きな変化がなく、ほぼ一年を通し 70~80 千 t 台で推移した。

#### 4. 需要部門動向

12 月の鉱工業生産指数は前月比 0.5%増、前年同月比 3.0%増の 100.4(季節調整済、2010 年=100 基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は 2 か月連続で上昇し、前年同月比も 2 か月連続のプラスとなった。軽自動車や小型車など乗用車が好調だった。化粧品なども生産が伸びた。経産省は生産の基調判断を「持ち直しの動き」に据え置いた。10~12 月は前期比 2.0%上昇の 99.6 だった。

12 月の生産指数は 15 業種のうち 12 業種が前月から上昇し、2 業種が低下した。横ばいが 1 業種だった。輸送機械工業が前月比 2.0%上昇、化学工業も同 1.8%上昇した。一方で情報通信機械工業が同 10.7%の低下、はん用・生産用・業務用機械工業も同 0.4%低下した。

12 月の出荷指数は前月比 0.3%減の 99.0 と 4 か月ぶりにマイナスに転じたが、前年同月比は 2.4%増と 2 か月連続のプラスとなった。

一方、在庫指数は前月比 0.2%増の 107.1 と 4 か月ぶりに上昇。在庫率指数も前月比 0.9%増の 108.8 と 3 か月ぶりに上昇した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、1 月が前月比 3.0%の上昇、2 月は同 0.8%の上昇を見込んでいる。

11 月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は再び前年同月比プラスとなった。しかし、数量は 26 か月連続で 100 万 t 台割れ。

11 月の伸銅品生産量は 67,350t(確報値、対前年同月比 +6.0%、対前月比 +1.5%)、2016 年(平成 28 年)5 月から 7 か月連続の対前年同月比プラスである。緩やかな回復基調が続いていると見られるが、11 月は銅条、黄銅棒が対前年比二桁のプラス、銅管、銅棒は二桁のマイナスとなった。内需向け 56,927t)、4 か月連続の対前年比プラス(+5.1%)。輸出向け 11,423t、6 か月連続の対前年比プラス(+10.3%)。

黄銅製品では、黄銅条が 8,426t。対前年比は 4 か月連続のプラス(+3.7%)、黄銅棒は 16,751t、7 か月連続の対前年比プラスとなり(+11.7%)、2011 年(平成 23 年)7 月以来の 17 千 t 近い高水準となった。

亜鉛関連製品生産統計

		10月	11月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	891,761	842,891
	前年同月比(%)	99.7	101.7
黄銅製品	数量(t)	28,075	28,933
	前年同月比(%)	101.0	107.3
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,652	1,575
	前年同月比(%)	89.7	97.5
亜鉛華	数量(t)	5,581	4,889
	前年同月比(%)	97.8	83.9

(出所:経済産業省生産動態統計調査)